

停止へ

裕 杏子

夜をも赫々と燃やし続けながら
ついに食卓の上まで引き下してしまつた
巨きな天の器に

(しかし光はいぜんとして速く球体をめぐり)
盛り上げた霊肉の果物は内部から崩おれた
叡知と欲望の手で捏造した神々の天秤に
ついに人はひと刻もやすらぐことなく
相對の極のあいだを振り廻されている

犯してしまつた自然の循環をはぐれて
あえいでいる草木虫魚
さかしまに墜ちてくる鳥
水子のまま死んでゆくわたしたちの夢

ますます濁りゆくいのちの水脈を分けて
やつと流れついたこの白じらとした洲浜で
人間がにんげんの悪臭に耐えていると
憎しみや怨みやが狂つたように分裂をはじめ
行き場なくまた洲浜にこびりついてくる
すがしい棘の領までのるわれれば
地上はいずこもおどろしい不安の棲家だ

それでも延びやまぬ欲望の手を
すてに無用の認識の闇へのばして
夜もお乱れた思惟を揺すつていと
なぜか足裏がほてりだし
毛根のようなものが生えてくる
よじる脇腹には鱗のようなものがぬめり
瘦せこけた土の貌がみえてくる
〃ゆかないで
いつまでもここにおいでて〃と
舌のないものたちの哀願が聴こえてくる



(カット 小林恒吉氏)